

IV 2016（平成 28）年度「オープンクラス」実施報告

1. 実施概要

オープンクラスによる相互授業参観は、教員同士が互いの授業を公開し授業内容や方法について検討することによって、授業方法に関する知識や技能を共有できるなどの利点がある。本学では2011（平成 23）年度よりオープンクラスを実施している。

2016（平成 28）年度は前期 2 週間、後期 3 週間のオープンクラス・ウィークを実施した。オープンクラス・ウィーク期間中は、原則として全ての授業を、本学の教職員と学生を対象に公開した。授業参観者から提出されたコメントシートの内容は、授業担当教員へ伝えられた。

2016（平成 28）年度「オープンクラス」実施状況

オープンクラス・ウィーク実施期間	参観者コメントシート提出数
6月13日(月)～6月25日(土)	48
10月24日(月)～11月12日(土)	32

また、オープンクラス・ウィーク期間外に公開の申し出があった下表の授業について、オープンクラスが実施された。テーマはいずれも、「スマホを使ったアンケートシステム (respon) によるアクティブ・ラーニングの試行」で、下表 3. および 4. の授業後には、授業担当教員と参観した教職員による懇談会が行われた。

	実施日	科目名	担当教員
1	1月18日(水)	「家庭科教育法 II」	生活福祉文化学部 加藤佐千子教授
2	1月18日(水)	「家庭科教育法 IV」	生活福祉文化学部 加藤佐千子教授
3	1月19日(木)	「理科指導法」	心理学部 小川博士講師
4	1月20日(金)	「ライフステージと食生活」	生活福祉文化学部 加藤佐千子教授

2. 現状と今後の課題

本年度のオープンクラスは、参観者コメントシートの提出が前期 48、後期 32 であり、昨年とほぼ同数であったが、実際には一人の参加者が複数の授業を参観している場合があり、実参加者数はコメントシートの数よりもかなり少なかった。コメントシート未提出者があることを勘案してもオープンクラスの参加者は専任教員については約 4 割にとどまっており、職員についてはさらに少数である。また、非常勤の教員に関しては、自身の授業への参観はあっても、他の授業を参観するといったことはほとんどないよう見受けられた。

このように全学を挙げて活発に授業参観が行われているとはいえ現状ではあるが、参観者のコメントシートに書かれている意見の多くには、他の授業、とくに専門に近い授業を参観することにより自身の授業を振り返る機会となったと記されており、オープンクラスの取り組みそのものは授業改善に向けて一定の成果を上げていると評価できる。また、オープンクラス期間中は、教授者でも受講者でもない第三者の客観的な目が授業中の教室をチェックする好機であり、コメントシートに書かれた設備の不備についての指摘を関係部署へ伝達することで、教室環境の向上に繋がるといった効果も期待できる。

一方で、オープンクラスも開始されてから6年目となった本年度においては、マンネリ化したという意見もでており、実施方法の再検討が求められる時期に来ているといえる。とくに後期は例年、実施期間が前期より長いにもかかわらず参加者数が少ない傾向にある。これについては、実施時期が実習訪問や卒論提出前の学生指導に多くの時間を要する時期と重なることが原因のひとつと推察されることから、今後はより多くの教員が参加しやすいよう実施時期を考慮する必要があるだろう。

また、今年度は通常のオープンクラスに加えて、オープンクラス・ウィーク期間外の1月に、公開の申し出があった授業について別にオープンクラスを実施した。このオープンクラスの趣旨は「スマホを使ったアンケートシステム (respon) によるアクティブ・ラーニング」の紹介であり、本学が導入を検討しているアンケートシステム (respon) について、これを先に試行していた2名の教員による公開実践が行われた。

アクティブ・ラーニングの取り組みについては、本学においても今までに多くの研修会が開かれてはいるものの、今年度のオープンクラスの参加者から提出されたコメントの中にアクティブ・ラーニングに関する記載が非常に少なかったことから実際には日々の授業の中に取り入れることが難しいという現状がうかがえる。そのため大学全体での取り組みの必要性を提案する意見も寄せられていた。そこで、このオープンクラスにおいては、respon を用いた授業の単なる公開にとどまらず、初の試みとして授業担当教員と参観者による懇談会も実施し、実際に活用した体験を生で聞くことのできる時間を作り、好評を得た。それぞれの教員がアクティブ・ラーニングのツールのひとつとしてこのような新しいシステムを活用することは個々の授業改善の一助となると思われるため今回の授業公開には大きな意義があったといえるが、さらにそれだけでなく相互の直接的な意見交換の場として活用することで、オープンクラスの役割も広がる可能性があることが示された。

今後のオープンクラスの有り様としては、授業公開する側と参観する側のアクティブな情報交流の機会と位置づけ、コメントシートだけでなくリアルタイムでの意見交換の仕組み作りなども検討していくべきであろう。

文責:藤原 智子 (生活福祉文化学部 生活福祉文化学科 FD 委員)